

ポール・ヴィリリオ『ブunker・アルケオロジー』 についてのノート

本 間 邦 雄

ポール・ヴィリリオ Paul Virilio (1932～) については、日本でも翻訳書は10点以上にのぼり、思想家、都市・文明評論家として、相応に知られていると思われるが、どのような活動をしている人物か、ここで簡単に提示しておくのがよいだろう。

I ヴィリリオの略歴

筆者は以前、ヴィリリオの紹介文（小学館 DVD-ROM 版『スーパー・ニッポニカ』項目：ピリリオ 2004年発刊）を執筆したことがある。百科事典の項目であるが、電子媒体のみの発行なので、ここにあらためて引いておくのも無意味ではないと思われる。なお、表記（ピリリオ〔ヴァ行を用いない版元の表記法〕をヴィリリオにするなど）は一部変えてある。

フランスの都市計画家、評論家。パリに生まれる。幼少期の戦時中をナントで過ごす。パリの工芸学校に入学し、ソルボンヌの哲学等の講義も受講。アルジェリア戦争に召集される。1969年よりパリ建築学校（ESA）の教授となり、やがて校長も勤める。1987年には、設備・住宅、国土整備、運輸三省より、彼のそれまでの著作活動全体にたいして「批評国民大賞」を授与される。

1958年からノルマンディーを中心にブunker（＝トーチカ）などの戦争建築の実地調査、研究を開始し、『ブunker・アルケオロジー』 *Bunker Archéologie* (1975年) にまとめる。1977年には『速度と政治』 *Vitesse et politique* を著す。同書では、古代アッシリアの騎兵・戦車の疾駆やアテネの軍船の活躍でも知られているように、機動力つまり速度は、その領域を支配する政治権力と不可分である点を確認したうえで、その様態はもとより静止したシステムではなく、それ自体、伸縮可能な力を伝播する走行領域と考えるべき点が強調されている。この著作にいち早く注目したのがドゥルーズ＝ガタリであり、彼らの著作『千のプラトー』 *Mille plateaux* (1980年) の「遊牧論あるいは戦争機械」の章で再三論じている。またヴィリリオもドゥルーズ＝ガタリの著作や活動に共感を示している。

ところで、このような軍事＝速度力を可能にするのは、古来、物資の補給・輸送をつかさ

どる兵站術である。ところが第二次大戦後、核抑止力の時代になると、兵器の威力以上に、その潜在的配備力・開発力と情報操作の方に戦略の重点が移る。したがって『戦争と映画 I』(1984年)では20世紀の映像と戦争の関係が分析され、映像情報の記録・解析・シミュレーションをおこなう「知覚の兵站術」が語られることになる。さらに『視覚機械』*La Machine de vision* (1988)では、今日の日常世界に関しても、ヴァーチャルな映像が事物に優先している点に着目し、肉眼で現に人や物を知覚する世界から離れて、画面の世界が第一義的となる事態を論じている。こうして赤外線監視カメラから偵察衛星まで、地上・空中に縦横にはりめぐらされ、その惑星的監視態勢のなかでは「拘禁の感情」が今後ますます強まるとヴィリリオは語る(『電脳世界』*Cybermonde, la politique du pire*, 1996年)。

光速度による情報の伝播の世界では、地理的距離の廃棄はもちろん、現地時間(ローカルタイム)の消滅という事態も生じる。そこに君臨するのはリアルタイムの「世界時間」である。これは世界の均一化、相対的「縮小」を意味するが、そのことは、人間の身体が移動体の中で座席等に「不動化」することから推し量られるように、そのまま身体的自由・能力の相対的拡大を意味するとはいえない。むしろそのなかでは人間の身体的自由が拡張されるというよりも、身体内部が広く開発、投資の対象となるのであり、ヴィリリオは臓器移植など、身体がバイオ・テクノロジーの大きな市場となる点や、無謀な「速度」を求めるオリンピックのドーピング問題にも警鐘を鳴らしている(『沈黙という手続き』*La Procédure silence*, 2000年)。

ヴィリリオに関しては、ただ科学・技術に対する批判だけであるとか、議論が極端にすぎるといった評もあるが、テクノロジーの発展についてはその裏面が語られることが少ないので、あえてその批判的面を強調する役割を自分は担うとヴィリリオは語る。また不可視の潜在的戦争空間が視覚化されるケースである偶発的事故や人為的破壊に注目し、「起こること」*Ce qui arrive*と題して、建築家レベウス・ウッズ *Lebbeus Woods* の『崩壊』という巨大なインスタレーションなど造形作家のオブジェや、2001年のアメリカ同時多発テロによるツインタワーの崩落や1986年のスペースシャトル・チャレンジャー号の爆発など災禍・事故の映像作品の展示を企画し(パリのカルティエ財団現代美術館, 2002-03年)、災厄にたいする芸術家の視点を取り入れて、従来のドキュメンタリーや科学的検証とは異なる提示のしかた、反省のしかたを試みている。

■ 参考文献

▽ポール・ヴィリリオ, シルベール・ロトランジェ著, 細川周平訳『純粹戦争』(1987, ユー・ピー・ユー) ▽市田良彦訳『速度と政治』(2001, 平凡社ライブラリー) ▽本間邦

雄訳『電脳世界』（1998, 産業図書）▽丸岡高弘訳『ネガティブ・ホライズン』（2003, 産業図書）▽Paul Virilio: *L'Espace critique*（1993, Christian Bourgois）巻末書誌・年譜
▽「特集ヴィリリオ」（『現代思想』2002年1月号・青土社）

以上は、2003年頃までのヴィリリオのおもな活動である。その後、長らく絶版で手に入りにくかったヴィリリオの最初の著作である、『ブunker・アルケオロジー』*Bunker Archéologie*（1975年）がガリレー社から2008年に再刊された。

本研究ノートでは、ヴィリリオの思考のひとつの原型をかたちづくと考えられる『ブunker・アルケオロジー』の概要と問題事項をまとめてみたい。

II ブunker・アルケオロジー（1975年）——「大西洋の壁」の考古学

ヴィリリオの最初の著作は、『ブunker・アルケオロジー』*Bunker Archéologie*（1975年初版）である。これは、1975年12月10日より1976年2月末日まで、産業創造育成センターle Centre de Création Industrielle によって組織され、パリの装飾芸術博物館で開催された「ブunker・アルケオロジー —— ポール・ヴィリリオ」展の際に発刊されたものである。

さて、その「Bunker」であるが、これは、ドイツ語の「Bunker ブンカー」に由来する。コンクリート製の掩蔽壕、軍事用語でいうトーチカ（これはロシア語に由来）のことで、ドイツ軍が第二次大戦中、北大西洋沿岸に張りめぐらした、一連のこの種の軍事的防御施設を言う。1944年6月のノルマンディー上陸作戦を扱った映画では、古くは『史上最大の作戦』（1962年）、比較的新しいところでは『プライベート・ライアン』（スピルバーグ監督、1998年）にも登場しているので観たことのある方は思い出していただきたい。用途や規模によっていろいろな形態があるが、なかにはイースター島のモアイ像を思わせるものもある。軍事基地である以上、あのように誇示的に林立しているわけではないが、単体として点々と大西洋にその頭部を向けていたことであろう。

なお、「Bunker バンカー」は、英語でもこの種の施設の軍事用語として使われることもあるようだが、今日ではゴルフの「バンカー」の意味のほうが広く普及している。日本でも、まずはサバンナのようなゴルフ場にある砂の窪地が連想されるであろうから、とりあえず表記は「バンカー」ではなく、ドイツ語読みの「ブunker」しておく。ヴィリリオにとっては、あるいはフランス語読みの「ブンケール」と表記するほうがより正確かもしれないが、第二次大戦中に「大西洋の壁」となった、一連のコンクリート造りのドイツ軍の防御施設という歴史的意味を帯びていることを強調して、ここでは「ブ

ンカー」の呼称を用いておこう。なお、「大西洋の壁」(仏 Mur de l'Atlantique, 独 Atlantikwall)とは、ナチスドイツの土木技師・軍需大臣フリッツ・トート(1891~1942)の率いるトート機関(軍事土木計画実施機関)が設計・構築した、大西洋沿岸に張りめぐらされた軍事施設・防御ラインを指している。

さて、「Archéologie」のほうだが、これは文字通り「考古学」でよいだろう。もちろん、対象は古代ではなく近々の事象ではあるが、ヴィリリオは、以下に述懐しているように、第二次大戦後、地雷は撤去されたにせよ、海岸地帯に見捨てられ、廃墟と化したこれらの建造廃棄物の組織的調査をおこなったのである。

II—1 「まえがき」

この『ブンカー・アルケオロジー』(1975年初版)は、1991年に続いて、2008年に再刊行された。その「まえがき」(1975年)から見てみよう。ヴィリリオは少年期の第二次大戦中から説き起こしている。

まえがき(1975年)

私の若いころ、ヨーロッパの海岸地域は工事中という理由で、一般人は立ち入り禁止であった。そこには、壁が築かれていた。私がロワール河口に広がる大西洋を初めて見たのは、ようやく1945年の夏になってからのことであった。

この海洋の発見は、何にも代えがたい経験であり、心の中に滲み入るままにただ嘯みしめるほかはなかつただろう。実際、海洋の水平線の出現は、なにか付随的な経験などではなく、まぎれもなく意識の事実であり、そこからそれまで知らずにいた事象が次々に繰り広げられるのだった。

その夏のあいだに経験した、この発見のもろもろのシークエンスを私は何ひとつ忘れていない。この見出された平穏と解かれた禁止は、私にとってただ一つと同じ出来事を実現していたのだ。もろもろの障壁が取り除かれ、各自がそれ以降、自由にその広大な海原に接近することができていた。かの占領者たちは、もろもろの器具や武器を自分たちの作業場もろとも置き去りにしたまま、彼らの生まれ故郷に退却していたのだった。この海の前線の別荘群には人っ子ひとりいなかった。それにトーチカ casemates の砲・射撃範囲をふさいでいたあらゆるものは撤去されていたのだ。海浜には地雷が埋設されており、地雷処理班が、海への接近が可能になるように、あちこちで忙しく立ち働いていた。

ありありと思い出すそのときの心持ちは、まだなお、そのときのひと気のなさの感覚であった。つまり、ラ・ボールのその広大な浜辺はもの寂しく、ブロードの砂の入り江にいるの

は、私たち十人以下であり、通りという通りには何ひとつ乗り物も見られなかった。ここは駐留していた軍隊が打ち棄てたばかりの前線であり、この広大な海原は私にとって、見捨てられた戦場という、その様相と不可分であった（*Bunker Archéologie*, Galilée, 2008, p.13. 以下、引用文の括弧内に2008年版のページを記す）。

ここには、空襲で一夜のうちに町の風景が一変するナントの町で暮らしていた13歳の少年が初めて大洋を見たときの鮮烈な経験が語られている。今まで見る禁じられていた分だけ、初めてのものを見ることの期待で倍加されていただろう。そこには、間断なく打ち寄せる広い波と、果てしない水平線と、浜辺に点々と続く廃墟と化した軍事施設が見えただろう（なお casemate は、トーチカを意味するフランス語）。

その海辺は歴史的風景を喚起するものだった。海辺の情景は、無限と廃墟の刻印された歴史感覚のようなものを、少年ヴィリリオにそれとは知らずとも、忘れがたく植えつけたのではないか。

ヴィリリオは、同じく『ブunker・アルケオロジー』（1975年）の「まえがき」で、20年前のこと（ヴィリリオ 20代なかばの頃）を思い出している。ある日、その建築物と、沖に面した、がらんとした空間に連なる「大西洋の壁」の構築物の配置に、直近の過去であるとともに、おそらく近接する未来でもあるような、とも言えるだろうか、謎めいた異様さを感じたと思われる。

そのきっかけ、あるいはその発見 invention——その語の考古学的意味においてであるが——は、1958年の夏、サン・ゲノレの南の海辺にいたときに起こった。私が背をもたせていたコンクリートのかたまりは、さきほどは更衣室代わりになっていたものだった。私は海水浴場でおなじみの遊びをあれこれやり尽くし、ヴァカンスの最中ではあるがこれまでにないほどポカンと空っぽになっていた。そして私の視線は大西洋の水平線に投げかけられ、サン・ゲノレの岩浜と南のギルヴィネックの港の防波堤の間の砂浜がすっかり目に入っていた。ほとんど人はいなかった。起伏のない水平線をひととお見やってから、われに返ると、私自身の体重、暑さ、私が寄りかかっている頑丈な背もたれに気づいた。この傾斜したコンクリートの塊、この無用の長物は、それまで第二次世界大戦の残骸としてしか、ひとつの歴史のイラスト、全体戦争の実例としてしか私の関心を惹くことのないものだったのだ（p.15）。

私にとって一番印象的だったのは、すぐさま、内的にも外的にも押しつぶされそうになる感覚であった。地中にはまり込み、この小さなブロックハウスを固い土台としている傾斜壁。

砂丘は内部空間に侵入していたし、居場所の狭さは床の表面を覆っている砂の厚さによってさらに強調されていた。衣類や自転車が、物好きや盗人の目を逃れて、そこに散らばっていた。オブジェはその意味を変えてしまっていた。しかしながら、防御のはたらきは存続していた。

文化的に想起される一連の内容のすべてが私の興味を引いた。すなわち、マスタバ〔古代エジプトの四角錐の墳墓〕、エトルリアの墓所、アステカの建造物……。この軽砲台が埋葬儀式に同一化するかのようになり、トート機関が最終的に宗教的な空間しか構築できなかったかのように…… (pp.15-16)。

ブロックハウス Blockhaus は、原初的な木組み小屋・石組み小屋を意味する。この場合はコンクリート製であろう。「内的にも外的にも押しつぶされそうになる」とヴィリリオは語る。

このように、ヴィリリオは、ブunkerと埋葬建造物との相似性に思いをめぐらし、ブunkerを考古学的に探究することに思っていた。

私の目的は純粋に考古学的であった。私がこれらの灰色のフォルムを追跡したのは、ひとつには、それらが私にそのフォルムの謎を教えてくれることを期待してであり、またひとつには以下のような疑問文に集約される謎が明かされることを期待したからである。すなわち、海辺の別荘にも瞥えられるこれらの尋常ならざる建設物は、なぜ視線を通り抜けるのか、それとして目に止まりさえもしないのか？ 埋葬のアーキタイプ（原型）と軍事建造物のこの類似性はなぜなのか？ 大洋を前にした、この常軌を逸脱した配置とは？ 海洋の無限を前にした、この待機態勢とは？ (p.16)

ことの性質上、目立たないように、あるいは表面が偽装されもするこれらのブunkerが、注意深い視線には、逆説的に独特の存在感を発揮しているのとらえざるをえない。それは通常の住居、居住空間とはまったく異なる種類のもののように思われている。

防空的なブロックハウスは、もうひとつの生活様式を、現実というものの配慮に関するひとつの断絶を指し示していた。青空は、かつては脅威に、砲撃のかすかな破裂音もまぶされた爆撃機の鈍い爆音に満ちていた。都市の住居と掩蔽施設をこのように直接的に比較することは、慣れ親しんだ街中の建物と私が横断する港湾都市のふところにある廃ブunkerを比較することは、ひとつの対決の力、二つの似ても似つかぬ現実の切り貼り（コラージュ）の力

をもっていた。防空の掩蔽施設は私に人間の不安を語っていた。そして標準的なシステムの住居は、絶え間なく街を、都市を、都会的なものを再生産していた。

ブロックハウスは人類学的なものであり、その形象は、身体の形象をかたどっている。その居住単位は、モデル（型）の任意の反復にほかならない。ただひとつの同じ直角の平行六面体の型である。沿岸の風景の窪みにいとも容易に身を隠すトーチカ casemate はこの地では反感を買うものであったが、その近代性はそのシルエットの独創性からくるというよりも、周囲の建築的形態の極端なまでの凡庸さからくるものであった。その曲面の輪郭は、これら港湾地域においては、砂丘とそれに隣接する丘陵の湾曲の痕跡のように溶け込んでおり、特にこの自然らしさが眉をひそめさせたのである…。ブunkerの輦蹙である（p.18）。

ブロックハウスは、先に触れたように木組み小屋・石組み小屋を意味し、建築的形態としては、原型的なもののひとつである。その形態は地下墳墓とブunkerの双方につながる。

この本来的に考古学的な断絶から、私は建築的なアーキタイプ（原型）の問題を再検討したいと思うようになった。地下墳墓、櫃、舟形聖遺物入れ…（p.20）。

ヴィリリオは「まえがき」（1975年）の最後を、近代戦争のもたらしたブunkerという原型的建築内の、息苦しく不安な地下冥界めぐりのごとき、経めぐりで閉じる。

奥の方へと侵入をつづけていくと、この堡壘の内部に接近戦防御のための、銃眼付き——ひとつは入り口に向けられ、もうひとつは側面に向けられている——のジグザグの通路システムが見出される。視界が広くない、小さな銃眼壁が張りめぐらされている。

そこから、差し迫った接近を監視できるのだが、狭い空間の中で天井が人の頭をかすめそうになる。押しつぶされそうな感覚はその堡壘の外部をめぐって歩いても感じられるのであるが、内部ではいっそう強調される。おおかたのヴォリュームサイズは、通常の運動、身体の現実的な可動のためにはあまりに狭い。建物全体が、占有者の両肩にずっしり重くのしかかる。ちょっとだけ大きすぎると感じる衣服が、それがあなたをくるむと同じだけあなたを窮屈に感じさせるように、コンクリートと鋼鉄の覆いは、その袖付けのところが窮屈で、病気の半痙攣にかなり近い半痙攣によってあなたを身動きできなくさせる傾向にある（p.22）。

身体的動作は緩慢になるが神経は張り詰め、自身の環境をめぐるもろもろの破局的な見込

みに不安を感じながら、この危険地域の住人は、奇妙な重力によって気圧^{けお}され、息苦しくなる。事實は、避難場の防護によって彼が回避できるはずの、その死後硬直を彼はすでに全身に帯びているのである (pp.22-23)。

そこは外界からの避難場所でもあるはずなのに、その防御のための開口部の狭さ、通路の狭さによって、閉所恐怖症に身が縮む、地下墳墓の悪夢、冥界迷宮のごとき不安を誘発せずにはおかない。

付け加えれば、ブンカーには名前、愛称が付けられていたようだ。ヴィリリオが挙げているところでは、バルバラ Barbara, カローラ Karola がある。いずれも女性の名である。避難場所としての母体回帰であるとともに、敵対する外部にたいしては恐ろしいメドゥーサ女神ともなる。しかし、その身を匿うはずの子宮が、ときにはその狭い産道をくぐり抜けねば生命の保全が危うくなるような、外側からも内側からも締め付けられる、死後硬直のごとき緊張を強いるものなのである。生と死の緊張と不安の両義性がそこに凝縮されて経験されるかのようだ。

II—2 本文構成

さて、この「まえがき」を含め、『ブンカー・アルケオロジー』の構成は以下のようになっている。

まえがき

軍事的空間

要塞

モノリス

「大西洋の壁」の軍事施設の類型論

アルバート・シュペーア

地図作成法

年譜

付録戦時指令

あとがき

索引

書誌

本文についてであるが、「軍事的空間」の章では、ヴィリリオではおなじみの「速度」*vitesse*、「収縮」*contraction*、「ミニチュア化」などの概念がすでに出てきている。「速度」は、道路の整備と直線性など、古代の植民地開発から現代の高速道路に至るまで、領土的な整備統合、国家や帝国運営において当初より基本的原理となっているというヴィリリオの主張がここにも見られる。権力と支配の維持のためには、最新速度の移動手段と通信手段と最速の破壊兵器を手の内に入れることがアドヴァンテージになることはおのずと了解されよう。

また陸・海・空の軍事的様態は、大きく変貌している。その規模の量的増大というよりも、「〈運搬移動 - 兵器〉の収縮と、システムのサイバネティック化、軍事的機器類の量的縮小化、すなわちミニチュア化」(p.27)が鍵となる。このように、「軍事的空間は現在、根本的変換を余儀なくされている」(p.27)。「空間の征服」は、もはや過去のように人間居住地の領土的・地理的征服というよりも、「地理的現実とは、もはや遠い関係しかもたないような、オリジナルな連続体の創成」(p.27)である。すなわち、「戦士」は、「同時に核物理学の無限小と天体間の無限大のなかで」(p.27)活動するのである。

「要塞」の章では、フリッツ・トートによる人員動員は、物理的防御ライン形成のためのみではなかったことにも言及されている。すでに空襲に見舞われていた占領地域の住民に、連合軍の上陸にたいして防御の態勢をとらせ、国土防衛の務めを意識させる「心理的・政治的必然性」(p.39)に結びついていたのである。

1943～44年には、各家庭の庭やアパルトマンの中庭に塹壕や防空壕を掘ることが勧められていた。パリなどの都市が破壊されたモンタージュ写真を流布して、防御ラインが突破されたときの破壊の猛威と恐怖を沿岸地方の住民に植え付けようとしたという(p.39)。そのプロパガンダがどの程度浸透したかは別にしても、地域住民の意識としては、空から爆弾が地上に投下され、ドーバー海峡の彼方から連合軍が押し寄せようとする圧力のなかで、地面の下、地中にとにかくも身の安全の場所の確保を求めたであろうことは想像に難くない。

ナチスドイツの支配の及ぶヨーロッパは、イギリスに対して「ヨーロッパ要塞」とも呼ばれていたが、「要塞はこのようにして、相当の心理的価値をもっていた」(歴史家R-G・ノベクルの言葉 p.39)

「モノリス」の章では、まず、ブunkerが近代的なモノリス(一枚岩)的建築の非常に稀な例であることが指摘される。そして当時の戦火の環境は、「人工的気候」環境とみなすことができ、それが「汚染」、「飽和」、「生態学的不均衡」(p.49)など、20世

紀後半に問題となる環境問題のプロトタイプとなると述べる。前章でも論じられているが、トート機関は、「大西洋の壁」だけを構築したのではなく、一般住民の無数の防空壕を敷設せしめたのであり、「居住不能となった地表から離れて生き延びるために、ひとつの社会がまるごと地中にもぐる」(p.53)のである。

ブunkerにもどるが、それは、兵器・弾薬の集積所であるとともに、監視室、銃砲の操縦室でもある。それが通常の建築とは異なる「人類学的特徴」(p.59)である。そこには「兵器の機能と、眼の機能とのあいだの緊密な関係」(p.59)がある。そのような武力・知覚装置であるため、敵対する外界の眼をのがれること、攻撃等の衝撃にたいする耐性をもつことが要件となる。そのため、地中にもぐりこむようにして、最小限の開口部もつ上部のみ顔を出すようなたたずまいが一般的であろう。偵察機や海上から目につかないようにされている。地形になじむかたちで設計され、ペンキや木枝や藁などでも偽装されている。防御のためであるが、流体力学に沿うように流線型が多く用いられる。そのため、風景という背景(地)にかろうじて浮き立つ図柄(図)というよりも、外に向けられた回転式の銃座がぐるりと戻るときに開口部が閉じられるように、施設そのものがシステムとして背景(地)化することもある。

ブunkerはこうして「現前しつつ、かつ不在の神話」(p.63)となる。「透明で開放的な市民的建築にとっては嫌悪の対象」として現前する。「新しい要塞の本質は他所にあるということであり、今後目には見えずに、私たちの足元の下にあるかぎり」(p.63)、不在となる。そしてこの大戦後の浜辺で、姿を消した種族の抜け殻であるかのように置き去りにされ、ブunkerは、「西洋の軍事的歴史における、ひとつの勝負の終わりの最後の演劇的ふるまいとなっている」(p.63)とヴィリリオは語る。

以降の章については、「「大西洋の壁」の軍事施設の類型論」は、文字通り、多様なブunkerの形態の分類が示され、「アルバート・シュペーア」は、ナチスドイツの建築家で、トートの後の軍需大臣のシュペーアの事業について論じたものである。「地図作成法」は、ノルマンディー地方の軍事施設配置図(当時では、最高機密であったであろう)などを載せ、「付録 戦時指令」はヒトラーの指令書などを収録している。

以上、1975年刊の『ブunker・アルケオロジー』には、ブunkerの建築学的原型性のもとより、速度論や軍事システム・装置の変容とそれにとまなう空間の変様、環境汚染などヴィリリオの後年の思想の萌芽が見られる。

この時点でまだ起こっていなかったのは、スリーマイル島原子力発電所事故(1979年)、チェルノブイリ原子力発電所事故(1986年)、そして9.11同時多発テロ(2001年)

等である。

本書が最初に刊行されてから30年余り経ったとき、ヴィリリオはそれをどのように振り返っているのだろうか。

Ⅲ ブンカー・アルケオロジー 「あとがき」(2008年)

最初に触れたように、30年以上経ったガリレー社の2008年版には、新たに「あとがき」が添えられている。それを以下、紹介しておこう。

あとがき (2008年)

堅固な住まいである、その鉄筋コンクリートの一枚岩^{モノリス}は、避難場所や「要塞」というよりも、人類史における困い込みの完全な象徴^{シンボル}である。

核シェルターとして、あるいは放射能にたいして遮蔽壁か、さらにはチェルノブイリのようにコンクリート製の石棺かによって防御された原子力発電所の「退却室」として、その地下墳墓的な建築物は、21世紀を展望しつつも、20世紀にきっぱりとその痕跡をとどめるものとなっていると言えるだろう。それは、私たちの狭い惑星における距離というものの時間的圧縮を前にして、生態的な避難場所の欠如のしるしともなっていることだろう。この地球上では、汚染された「自然」(NATURE)の温暖化による温室効果にたいしては、生物多様性だけではなく、かつては巨大であった大地の広さの地理多様性をも消尽する現実の加速により、「実物大」GRANDEUR NATUREのもろもろの尺度も圧縮するという、その気づかれぬ効果が重ね合わされているのである。そこから、なんらかの「大地殺戮」GEO-CIDE(ミシェル・ドゥギー)という前代未聞の予測すら生じ、それが明日には、遠慮のない反-自然的な刷新をともないつつ、過去のあれらの「大虐殺」GENO-CIDEのバトンを受け継ぐのかもしれない。その予測においては、「反物質」がそのエネルギーとなっていて、それを前にしては、いかなる防御もいかなる実効性のある避難場所もありえないというものだ。

建設構造的思考にとっては手に負えない災厄の「危険のモニュメント」として、その「ブロックハウス」BLOCKHAUSは、こうして「いっさいの希望に反する鬼っこ」の象徴的な形象となったのだ。もはやなにかの^{ノウハウ}技量の偶発的展開でしかない、技術的であるが全然倫理的ではないような成功の過剰によって、良心だけではなく意味も剥奪されてしまっている科学の魔力に直面しているのであり、その^{ノウハウ}技量にたいしてはいかなる物理的な物質も抵抗できず、またいかなる地球物理学的な距離も無傷のままではいられないという事態である。

生物圏の真ん中で、現世の獲得知識の汚染。カール・ポパーが、「進歩」に夢中になってい

る科学者たちに、彼の名高い「反証可能性の原理」を何としても提示したときにまだ保持されていたなんらかの科学的懐疑にたいして、その「検屍」の勝利。もう片方のこの責任の原理については、もうだれも語らない。

今日、生態学が私たちにこれほどまでに露骨に「進歩」の拘禁というものを、人類史がその犠牲となっているこの「大監禁」(フーコー)を露わにしているときに、建設構造的な思考には、この建築オブジェ、この「ブンカー」を除いて、いったい何が残っているだろうか。そのどっしりとした厚みある量塊は、昔のように爆破 *explosifs* にたいして持ち堪えるためというよりも、今回はとくに内部破裂(内破) *implosif* がその原因となるような脅威を私たちに告げようとしているのである。すなわち、まったくの無あるいはほとんど無に帰した地球惑星上において、進歩主義者たちがかつて私たちに語っていた「歴史の未来主義」のバトンを受け継ぎもするであろう刹那性の未来主義による、時間的距離の不可避的な収縮という脅威である。

「壁」が歴史の地平を塞ぎに新たに立ちもどってくるまさにそのときに、「大西洋」の要塞の幻影が、そのあらゆる荒廃的なイロニーにおいて、再び立ち現われるのである。

ポール・ヴィリリオ

2008年3月 (pp.115-116)

コンクリート製のモノリスは、人類の「囲い込み」のシンボルであるとヴィリリオは言う。チェルノブイリの「石棺」を連想させる、原子力発電所の「退却室」は、まさしく地下墳墓的である。その「石棺」に納められたかに見なされているのは、荒ぶる核エネルギーの手に負えない余剰であり、恐る恐る核シェルターに閉じこもるのは、居場所のない人間であろうと言う意味でも象徴的である。

内破(内部破裂) *implosion* とは、シェルターの内部で、拘禁状態で精神に異状をきたすことと、人間の身体の内外部が内部被爆するということが、この二つの意味をもつだろう。また、速度世界において地球が相対的に小さくなって、その中で、人は拘禁状態にあるようになり息苦しさを感じるとすれば、それは、同様に縮小された地球内の「内破」と言うほかはないだろう。

また、新たな「壁」は、「私たちの狭い惑星における距離というもの時間の圧縮」という、今日の速度世界の「壁」である。速度世界の中にあるということは、移動が猛然たるスピードでおこなわれるということであり、猛スピードで走る車が田園風景の中の平穏そのものの樹木に誤って接触すると、それが「壁」となって大破するように、触れるものすべてが「壁」となるということでもある。

建築構造的思考には、この「大監禁」の時代にあつて、「ブunker」しかないといヴィリリオは語る。防御されているかに見えて、しかしそれは閉所である。囲い、匿いであるかに見えて、しかし 監禁に相即している。墳墓に似ることは、当然なのか、逆説的なのか。それは生と死の逆説なのか、近接なのか、裏表なのか。こうした問いをヴィリリオは私たちに投げかける。

★ 本稿の終わりに、ヴィリリオの主要著作一覧を挙げておく。翻訳のないものについては、括弧内に仮の邦題を入れておいた。

《ポール・ヴィリリオ 主要著作一覧》

- ・ *Bunker Archéologie* (ブunker・アルケオロジー), édition du CCI, 1975 ; nouvelle édition, Galilée, 2008
- ・ *L'insécurité du territoire* (テリトリーの不安), éditions Stock, 1976.
- ・ *Vitesse et Politique, Galilée, 1977*. 『速度と政治』市田良彦訳, 平凡社, 1989. 平凡社ライブラリー, 2001年。
- ・ *Défense populaire et Lutttes écologiques, Galilée, 1978*. 『民衆防衛とエコロジー闘争』河村一郎+澤里岳史訳, 月曜社, 2007年。
- ・ *Esthétique de la disparition* (消失の美学), éditions Balland, 1980.
- ・ *Pure War, Foreign Agents Series, New York, 1983*. ポール・ヴィリリオ+シルヴェール・ロトランジュ 『純粹戦争』細川周平訳, ユー・ピー・ユー, 1987年。
- ・ *L'Espace critique* (臨界=危機的空間), éditions Christian Bourgois, 1984.
- ・ *Logistique de la perception, (Guerre et Cinéma 1)*, éditions de l'Etoile, Cahier du Cinéma, 1984. 『戦争と映画 I —— 知覚の兵站術』石井直志・千葉文夫訳, ユー・ピー・ユー, 1988年。『戦争と映画』平凡社ライブラリー, 1999年。
- ・ *L'Horizon négatif, Galilée, 1984*. 『ネガティブ・ホライズン』丸岡高弘訳, 産業図書, 2003年。
- ・ *La Machine de vision* (視覚機械), Galilée, 1988.
- ・ *L'Inertie polaire*, éditions Christian Bourgois, 1990. 『瞬間の君臨』土屋進訳, 新評論, 2003年。
- ・ *L'Ecran du désert* (砂漠のスクリーン), Galilée, 1991.
- ・ *L'Art du moteur, Galilée, 1993*. 『情報エネルギー化社会』土屋進訳, 新評論, 2002年。
- ・ *La Vitesse de libération* (重力脱出=解放の速度), Galilée, 1995.

- ・ *Cybermonde, la politique du pire*, entretien avec Philippe Petit, éditions Textuel, 1996. 『電腦世界 —— 最悪のシナリオへの対応』本間邦雄訳, 産業図書, 1998年。
- ・ *Un paysage d'événements (出来事の風景)*, Galilée, 1996.
- ・ *Voyage d'hiver (冬の旅)*, entretien avec Marianne Brausch, éditions Parenthèses, 1997.
- ・ *La Bombe informatique*, Galilée, 1998. 『情報化爆弾』丸岡高弘訳, 産業図書, 1999年。
- ・ *Stratégie de la déception*, Galilée, 1999. 『幻滅への戦略』河村一郎訳, 青土社, 2000年。
- ・ *La Procédure silence (沈黙という手続き)*, Galilée, 2000.
- ・ *Ce qui arrive*, Galilée, 2001. 『自殺へ向かう世界』青山勝・多賀健太郎訳, NTT 出版, 2003年。
- ・ *Ville panique*, Galilée, 2004. 『パニック都市——メトロポリティクスとテロリズム』竹内孝宏訳, 平凡社, 2007年。
- ・ *L'Accident originel*, Galilée, 2005. 『アクシデント 事故と文明』小林正巳訳, 青土社, 2006年。
- ・ *L'Art à perte de vue (果てしない技法)*, Galilée, 2005.
- ・ *L'Université du désastre (災厄の大学)*, Galilée, 2007.
- ・ *Le Futurisme de l'instant (瞬間の未来主義)*, Galilée, 2009.
- ・ *L'Administration de la peur (恐怖の管理)*, entretien mené par Bertrand Richard, éditions Textuel, 2010.